

指 昭博編

『「イギリス」であること』

——アイデンティティ探求の歴史——

宮 川 剛

かつての大英帝国の解体からEU参加へと、世界におけるイギリスの位置づけは大きく転換しつつある。イギリスという国の主体性が問われる現在、歴史研究においても、アングロ・サクソン期から現代史にいたるまで、夥しい数の研究者がアイデンティティの問題を取り上げている。例えばわが国では、本国のナショナル・アイデンティティを強化し、イギリス人意識の形成に重要な役割を果たしたものである「帝国意識」を扱った木畑洋一編著『大英帝国と帝国意識』（ミネルヴァ書房、一九九八年）が思い浮かぶ。海外では、反カトリック感情、対仏戦争との関わりにおいて一八世紀におけるイギリス人意識（ブリティッシュネス）の形成を考察した Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (1992) は、このテーマを論じる上での必読書である。つゝ Paul Langford, *Englishness Identified: Manners and Character 1650-1850* のように本年（二〇〇〇年）出たばかりのものにいたるまでこの分野・テーマの研究は陸続として切れ目が無い。

本書は、このような流れを受けて書かれた論集であって、執筆者九名は全員、大阪大学文学部西洋史研究室とかかりを持つ研究者のグループである。本書が目指すのは、「イングリッシュ」の黎明期から「帝国」にいたる歴史のなかに、その時代の社会・国家の「まとまり」を支えた観念Ⅱアイデンティティとしての「イギリス的なもの」の意識の変貌をたどることにより、この曖昧な観念がその時々においてどのように機能してきたのかを明らかにすることである（「はじめに」より）。論集という性格上、各論文の概要は評者の短評を組み込んだかたちで以下に紹介したい。

第一章「イングリッシュ」の成立——アングロ・サクソン期におけるイングリッシュ意識（指珠恵）は、一〇世紀のイングリッシュの政治的統一の実現に先行して現れた「イングリッシュネス」理念や意識の形成過程を考察する。著者によれば、イングリッシュの統一過程の特色は、統一という現実在先立つてその理念が形成され、現実が理念を後追いついた点にあるという。すなわち、八世紀のベダの『アングロ人の教会史』の記述のなかに、イングリッシュ教会の統一の理念、アングロ・サクソン諸族をひとつの民族とみなす意識、政治的統一に関する展望といったイングリッシュ統一の理念が現実を先取りする形で現れた。九世紀後半のアルフレッド大王の時代に、デーン人の侵入という外圧を契機に、アングロ・サクソン内部の対立、および、八世紀マーシャのオフア王の時代以来、王権の干渉に対して警戒していたカンタベリ大司教と王権との対立が宥和され、ベダの示した理念が現実化しはじめる。さらに、アルフレッドの下での学芸復興、ラテン語の著

作の英訳を通じて共通の文化という要素が加わり、「イングリッシュユネス」意識が形成されていくという。その後イングランドを核として「イギリスらしさ」が展開していく出発点がここに明確に示されている。

第二章「他者としてのアイルランド」（山本正）は、中世から一六世紀までヨーロッパのなかの辺境の二流国であったイングランドにとって、アイルランドは大陸ヨーロッパへの劣等感を補償する劣った他者としての役割を果たしていたものとみなし、一二世紀のジェラルド・オブ・ウェールズの『アイルランド地誌』と一六世紀後半のエドマンド・スペンサーの『アイルランド地誌』についての一見解』という中近世にまたがる二つの史料を用いて、イングランドの対アイルランド人意識の考察をおこなっている。

従来の時代区分を越えて、一六世紀末までをひとまとまりの考察対象とする点が特徴的である。ジェラルド、スペンサーの両者ともイングランドとアイルランドの社会の違いを発展段階の差と解釈し、農耕的・都市社会的で「文明」的なイングランドと、牧畜的で「野蛮」なアイルランドという対立図式を提示して、イングランドの優秀さを主張する。他方、しかし、イングランド人入植者が現地のアイルランド文化に染まって「アイルランド人化」するという現象、すなわちイングランド人の「墮落」にみられるように、イングランド人の優越感には常に隠微な影がさしていたのだ。著者は、このことは、所詮はヨーロッパのなかの二流国にすぎない一六世紀末までのイングランドに宿命的なアンビバレンスであろうと示唆している。従来、イングランドの対アイルランド蔑視の要因としてカトリシズムが前提とされていたのに対して、

蔑視が中世にまでさかのぼり得ることが史料分析を通じて明らかにされた点は示唆に富む。

このような他者との接触を通じての自己認識、他者認識の背後の自己認識という興味深いテーマは、第三章「外国人を見る眼差し——近世演劇における外国人観」（中川順子）において新たな展開が示される。ここでは、一六世紀後半からビュリタン革命までの時期の多数の演劇作品に現れた外国人の描き方の検討を通じて、当時の外国人イメージおよびそれと裏腹のイングランド人意識のあり方が明らかにされる。一六世紀には、大陸の外国人に対して劣等感を抱いていたイングランド人は、それを克服するためにかえって外国人を貶めるようなステレオ・タイプ化した外国人像を喜劇や幕間劇、史劇によって流布させる一方で、多くの美德を備えたイングランド人像が対置された。しかし、一五九〇年代以降、特に一七世紀の市民劇の流行とともに、風刺の対象は主にイングランド人自身となって、外国人観はかつてほど悪意に満ちたものではなくなる。この点に著者は、外国人に対する寛容さを示しうるほどに自信を深めていったイングランド人の姿、すなわちイングランドの国民意識のひとつの到達点を見出している。大量の演劇作品を駆使した議論は大いに刺激的だが、このような形でステレオタイプ化された外国人像という鏡に映し出された自画像もまたステレオタイプの域を出ないという憾みがありはしないだろうか。

第四章「ブルータス伝説」（指昭博）は、イングランド土着のブリトン人がトロイア起源であるという「ブルータス」伝説に対して、一六世紀から一八世紀にかけてなされた支持と批判とを検

討する。従来、この伝説は荒唐無稽な伝説として片付けられ、歴史研究においてあまり関心を集めてこなかったが、著者は、この伝説を支えた歴史的背景に注目し、ひいては当時のイングランド社会の自己認識の一端を垣間見ようとしている。ポリドール・ヴァーゼルらによる伝説否定論の存在にもかかわらず、この伝説はテューダー期に根強い支持を受けることになるが、著者によれば、伝説の支持・利用には二つの背景があるという。ひとつには、ウエールズ出身の新興王朝であるテューダー朝の正統性の根拠としてであり、もうひとつは、アリマタヤのヨゼフ伝説との関連でイングランドの教会が本来ローマ教会とは別系統の教会であると強調することにより、イングランド国教会の歴史的正当性を主張するためである。一七世紀以降にもブルータス伝説は根強く影響力を保ちつづけるが、やがてテューダー期に始まったサクソン時代の研究の方に重点が移るにつれて、この伝説にまつわる議論は下火になっていったという。歴史研究の埒外に置かれがちな伝説も、人々がすすんでそれを受容したことはそれなりの歴史的背景がある筈と考え、その検討考察を通じてイングリッシユネスの基盤に肉迫しようとする研究姿勢は、ひとつの有効な方法論を提示して見せたものとして評価したい。

第五章「イギリス風マナーの自立——「イギリス人」らしさの成立」(川北稔)は、イギリス風マナーの自立という現象を通して、イギリス人意識、イギリス人らしさの問題を考察している。従来マナーや作法の面で、いわば後進国であったイギリスでは、一八世紀後半以降、ヨーロッパの、とりわけフランスのマナーとは異なる、独自のイギリス風のマナー・作法が積極的に評価され

るようになった。著者によれば、イギリス風マナー成立の基盤には、比較的オープンなエリート集団の存在とイギリス人の「個人主義」とがあったという。一八世紀には、血統や土地所有などの伝統的なジェントルマンの基準に代わって、公共への奉仕などの行動様式がジェントルマンの資質として重視されるようになり、新たなジェントルマンの理想が形成される。この変化はイギリスの海外植民地の拡大や商業革命の展開の結果出現した貿易商、金融業者などから成る「擬似ジェントルマン」にとってはうってつけのものであった。イギリス人の「個人主義」(例えば、会話の少なさなど)は外国人の観察者には良い印象を与えなかったものの、私的空間を尊重するイギリス流の作法においてはむしろ重要な要素となった。作法・マナーの問題が、帝国の形成や商業革命、更にはそれらがもたらしたイギリス社会の変容といった大きな文脈の中に位置付けて論じられている点が誠に新鮮で興味深い。このような議論に接すると、イギリス的な「個人主義」の問題の深さ、微妙さ、難しさを改めて痛感させられる。

第六章「シエラレオネの黒人宣教師」(並河葉子)は、一八世紀末に設立された国教会伝道教会の西アフリカでの布教活動を取り上げ、一九世紀中頃において「クリスト教化」と「イギリス化」の関係の認識が、イギリス人とアフリカ人の間ではどのように違っていたかを考察している。一九世紀中頃の国教会伝道協会の指導者ヘンリ・ヴェンの書簡の分析を通じて、著者は、伝道協会本部のイギリス人たちが「文明化」とは「クリスト教化」の結果、おのずと進行するものであるとして現地社会の制度や習慣の性急な「イギリス化」には慎重な態度をとったことを明らかにす

る。この見解の基礎にはキリスト教に接した時間の長さに応じて文明の高低が決まるとする一種の発展段階論的な文明観があった。これに対してイギリス式の教育を受け、イギリス的な価値観、習慣を身につけた「ブラック・ジェントルマン」たるアフリカ人宣教師たちは「イギリス的なもの」にキリスト教と同様の普遍性を認め、現地社会の「イギリス化」の促進にむしる積極的であったという。「イギリス的なもの」がアフリカのような植民地へ出かけていくとき、それは結局「ヨーロッパ文明」という普遍性を装うことになるのではなからうか。その時、なおそこに残る「イギリス的なもの」とはどのようなものなのか、この興味深い論考のなかで論じ残されている問題があるとすればこの点であろう。

第七章 「最もイングリッシュなもの、それは最も美しい」

——一九世紀オーストラリアとブリティッシュ・アイデンティティ（藤川隆男）は、白人植民地オーストラリアとのかかわりにおいて明らかとなる、ブリティッシュ（イングリッシュ）・アイデンティティについて考察している。イングリランド人がオーストラリアについて著述するさい、いかにイングリランド的であるかが価値基準となるため、オーストラリア描写と同時に著者のイングリランド観があらわれるという。藤川氏は、イングリランド出身のルイザ・アン・メレディスの著作を題材に、オーストラリアの景観や社会に対するメレディスの評価がはからず明らかにしてしまいう、イングリランドのものの内容を考察する。とくに、メレディスが植民地の社会について叙述する場合、彼女の階級・ステイタス意識にそぐわぬものを「アン・イングリッシュ」であると非難するなど、彼女がイングリランド的と考えるものは、彼女の階級

意識によって規定されていたことが指摘されている。つぎに、藤川氏は、聖バトリックの日の行事をてがかりに、メレディスのようなジェントルマン階級のイングリランド人とは異なる、植民地オーストラリアのアイルランド系人植民者の意識・アイデンティティの変化を分析する。一九世紀後半以後、アイルランド系カトリックが行事のイニシアティブを握るようになり、世紀転換期には、ますますアイリッシュ・アイデンティティが強調されることになるものの、その実これはあくまでも帝国の存在を前提として受け入れた上でのアイデンティティの主張であった事実が指摘される。このように、植民地オーストラリアを介することにより、ブリティッシュ・アイデンティティはより多角的な考察が可能となるわけである。示唆に富む刺激的な論文であるが、できれば後半でアイルランド人の目からみたオーストラリア観とそこから窺えるアイルランド人意識の問題にまで論が及んでいればと惜しまれる。そのとき前半の論との整合性が成立してより興味深い研究になった筈だが、史料の制約からやむを得なかったのかも知れない。

第八章 「一九二四年大英帝国博覧会——博覧会にみる帝国とブリティッシュネス」（川本真造）は、二〇世紀のイギリス諸島におけるブリティッシュネスの形成と変容に対して海外植民地が与えた影響を、一九世紀末から戦間期の博覧会、とくに一九二四年の帝国博覧会に注目して考察している。川本氏によれば、帝国内諸地域の自立化傾向が強まるなかで、帝国の一体性を強化・顕示する目的で一九二四年の帝国博覧会が開催されたが、実際に博覧会で明らかになったのは本国と海外植民地の間の隔たりの方であったという。川本氏は、海外植民地、本国双方による展示の内容

の分析を通じてこの点を明らかにしようと試みる。すなわち、海外植民地の側の展示では、各地の社会的・文化的アイデンティティが強調されるとともに、一次産品供給地という海外植民地の経済的性格がクローズアップされた。それに対して、本国側の展示では、多様な地域からなる帝国を支配してきた歴史が強調され、それとともにイギリスの工業生産地としての特色が誇示される。しかし、ここにある微妙なそして一見奇妙とも思える心理的ダイナミズムが生み出される。すなわち、戦間期にはイギリス諸島内の地域ナショナルリズムが強まる一方であったにもかかわらず、「他者」である海外植民地がひとたび目前に對置されてみると、諸島内の各地域が改めて本国の一員としてのブリティッシュネスのアイデンティティを自覚するに至ったというのである。博覧会の意図した「帝国の一体化」の失敗が、はからずも足元の一体化を促進したのではないかとの仮説は興味深い指摘ではあるが、今後これにはより実証的な検証を加えられることを望みたい。

第九章「ナショナル・トラスト——景勝地保護と国民統合」（水野祥子）では、歴史的建造物や景勝地を国民の遺産として保護することを目的として一九世紀末に設立されたナショナル・トラストの活動が、ナショナル・アイデンティティの形成・強化において果たした役割が考察される。水野氏は、この運動に参加した世紀転換期のエリート層が抱いていたナショナル・アイデンティティの重層性に注目し、その実態を明らかにしようとする。トラストが保護の対象としたのはイングランドのみならず、アイルランドをすら含んだ連合王国全体の歴史建造物・景勝地であり、そのなかにはケルト人やローマ人の遺跡も含まれる。ここからト

ラストがイングランドに偏らない、イギリス諸島全体にわたる集合的アイデンティティ形成を目指したことが指摘される。つまり、連合王国共通の過去を創出することによりブリティッシュネスの強化が図られたというわけである。ところが、戦間期になると、ロンドンの本部とスコットランドなど各地域のトラストとの交流が途絶えていった結果、たとえばスコットランドではスコットランド・ナショナル・トラストが設立されるなど、各地域の独自性が強まった。しかし、水野氏によれば、この分離傾向は、既に確固たるものとなったブリティッシュネスの枠組みを前提としたものであったという。ナショナル・トラストの運動をナショナル・アイデンティティに絡めて論じている点に新鮮さを感じられる。各地域の融合によつて達成されるブリティッシュネスとは別に、各地域が独自性を保持したままブリティッシュネスのもとに統合される、いわゆる「二重のアイデンティティ」の問題を考えさせる論考である。

以上、評者の短評を交えながら各論文の概要を紹介した。ここから浮かび上がってくる本書の大きな特色を一口で言うなら「パランス配置の良さ」であろう。直接スコットランドとウェールズを扱った論考を欠くという憾みは残るものの、時間（アングロ・サクソン期から中世、近世、近代、二〇世紀）と空間（本国、アイルランド、オーストラリア、アフリカ）、更にはテーマ（演劇、伝説、マナー、祭日行事、博覧会、環境保護）のそれぞれについて、これほど行き届いた目配りを施すのは容易なことではなく、それを為し得たのは編者の大きな功績であるとともに、この研究

グループの学問の幅と力量の結果であろう。そのことが、イングリッシュネス／ブリティッシュネスという極めてよく論じられるわりには全体像の把握が意外に困難なテーマを、その複雑さ、重層性を安易に切り捨てることなく、生きた形で提示することに成功した所以であると思われる。次の特色は、多くの論考が「イギリスらしさ」という、ある意味では主観的な記述に堕しかねないテーマを扱うにあたり、「他者」という鏡を極めて意識的にかつ有効に活用して、概ねその危うさを回避し得たことである。もちろん、鏡は常に正確な自画像を映し返してくれるとは限らず、時には鏡の不完全さの故に、却って像を歪めたり曇らせることもないわけではないのだが。他方、イギリス本国内の様々な階層ごと

にそれぞれの「イギリス人意識」があることが当然予想されるわけだが、この点について本論集では目配りが十分ではないという憾みが残る。故に、例えば、いわゆる帝国意識と階級意識の問題なども、これらの議論からは抜け落ちることとなるわけである。最後に、近年、旧植民地からイギリス本国へと移り住んできた人々のイギリス人としての意識形成の実態という今日的な問題なども、本論集の成果に基づいて、将来新たに考察が為されることを望みたい。

(A5判 二三三頁 一九九九年五月 刀水書房 四二〇〇円)
(京都市立芸術大学非常勤講師)